

新渡戸稲造の「武士道」(Bushido : The Soul of Japan)

(モービル石油社、アクゾ ノーベル社(オランダの化学系企業)に勤務していた頃、欧米の友人から新渡戸稲造の「武士道」について聞かれたことがあった。答えられなかった。古希を過ぎて漸く時間にも恵まれ、読み終えることが出来た。十一月十八日の神奈川银杏会三火会で、読後感として発表した。その骨子をホームページに載せるべく、原稿を少し書き直した。

(一)新渡戸稲造がこの本を書くにいたった動機、この本の(二)内容の要点のまとめ、(三)私自身の感想コメントと三部からなりたっている。

新渡戸稲造は、この本を英文で、欧米の知識層を相手に、米国で出版した。欧米の読者に分かり易くするために、欧米の宗教、文芸から数多くの引用をし、比較文化論を展開しながら、日本の武士道を説明している。

私は、この読後感をまとめるにあたり、欧米の読者のための数多の引用をむしろ省いて、三火会の会員に理解し易いようにまとめた。矢内原忠雄(岩波文庫)、奈良本辰也(三笠書房)、両氏の翻訳から多くそのまま引用している。分かりにくいところは、講談社インターナショナルの英文に直接確認した。IBCパブリッシング社の対訳ニッポン双書・武士道をも参照した。私的な勉強会の発表であり、其の方が会員に理解され易いと判断したからである。

始めに新渡戸稲造の履歴の概略を紹介した。稲造は、明治維新をさかのぼること六年、文久二年(1862)、盛岡藩の武士の子として生まれた。五歳で父を亡くしたが、九歳で叔父太田時敏の養子となり、上京して英語を学ぶ。この間、武士の子弟の徳目を叔父太田時敏、母勢着より学ぶ。明治十年(1877)十五歳で札幌農学校に第二期生として入学。明治十六年(1883)東京大學に入学。翌年米国ジョンズ・ホプキンス大学に留学。その後ドイツに留学、農政、農業経済学を研究。帰国後、札幌農学校教授となる。米国人女性メアリー・エルキントンと結婚。札幌農学校教授時代に猛烈に働き過ぎ、その後カリフォルニアで病氣療養中に「武士道」を執筆。明治三十三年(1900)武士道初版出版。その後、第一高等学校校長、東京大學教授、東京女子大学初代学長、国際連盟事務次長、等多くの要職を歴任。昭和八年(1933)カナダで客死。

一. 新渡戸稲造がこの本を書くにいたった動機

(著者は、序文の中で次のように言っている。)

(一) 約十年前、私はベルギーの法学大家故ド・ラヴレー氏の歓待を受けその許で数日を過ごしたが、或る日の散歩の際、私どもの話題が宗教の問題

に向いた。「あなたのお国の学校には宗教教育はない、とおっしゃるので
すか」と、この尊敬すべき教授が質問した。「ありません」と私が答える
や否や、彼は驚いて突然歩を止め、「宗教なし！ どうして道徳教育を授
けるのですか」と、彼は繰り返したその声を私は容易に忘れない。

長病いのためやむをえず無為の日を送っているのを幸い、家庭の談話で
私の妻に与えた答えを整理して、いま公衆に提供する。その内容は主と
して、私が少年時代、封建制度のなお盛んであった時に教えられたこと
である。

この著書の全体を通じて、私は自分の論証する諸点をヨーロッパの歴史
及び文学からの類例を引いて説明することを試みた。それはこの問題を
外国の読者の理解に役立つと信じたからである。

(長い間、心のなかにわだかまっていたテーマについて書いたのだが、次の引用文
からも分かるように、新渡戸稲造は若い頃から、日本の文化の欧米への紹介、欧米
の優れた学問の日本への導入に、生涯をかけていた。)

「太平洋の架け橋になりたい」(東大の入試の際試験官に言った言葉)

「この上は油断なく勉強いたし、日本はおろか世界に名を上げあげられ
るよう楽しみにしとります・・・」(母、勢喜(いき) よりの手紙より)

二. 内容

(一) 道徳体系としての武士道とその淵源 (第一、二章)

武士道は日本の象徴である桜花と同じく、日本の土地に固有の花である。
古めかしい価値を失ったものでなく、今なお力と美を兼ね備えて生きて
いる道徳的雰囲気である。武士道は封建制度の所産であるが、その封建
制度は消失しても武士道は生きのびて人倫の道を照らしている。

武士道は、武士階級のノーブレス・オブリージ (高い身分に伴う義務)
である。

武士道は、武士が守るべきものとして要求される道徳的徳目の作法であ
り、成文法ではない。せいぜい口伝によるか、武士や家臣の筆になるい
くつかの格言によって成り立っている。何十年何百年にもわたった武士
の生き方の有機的産物である。

武士道の成り立ちは、仏教と神道の教義から多くの影響を受けている。武士道の源泉は孔孟の教えにあるが、彼らの書物が日本にもたらされる以前から、日本人の本能が認知していたことの確認にすぎない。武士道の実践には「知行合一」が大切であり、王陽明の思想は新約聖書のなかに多くの類似性が認められる。

(二) 義・正義 (第三章)

武士にとって卑劣な行動、曲がった振る舞いほど忌むべきものはない。正義の道理つまり義理、それは義務のことである。私達にとって無条件に従うべき絶対命令である。

(三) 勇・敢為堅忍の精神 (第四章)

勇気とは義のために行われるのであり、進んで正しいことをする精神気迫である。

義を見てせざるは勇なきなり (論語)

「大義の勇」と「匹夫の勇」の区別は大切である。

これを身につけるには胆力を練磨することが大切である。

(四) 仁・惻隱の心 (第五章)

愛・寛容・愛情・他者への同情・憐憫の情は人間の魂が持つあらゆる性格の中で最高のものである。王者に不可欠な徳である。

仁は、「武士の情け」に内在する。

いつでも失われぬ他者への憐れみのこころ、か弱い者、劣った者、敗れた者への仁は、サムライに似つかわしいこととして奨励している。

(五) 礼 (第六章)

礼とは、他人に対する思いやりを目に見える形で表現することである。大切なのは、礼の厳しさを身に着ける過程である。つまり訓練すること。ことが大切である。あらゆる礼法の目的は精神を陶冶することである。茶の湯を例として取り上げ、一つ一つが礼の作法になっている。精神修養の実践方式である。礼は心の形である。

(六) 誠 (第七章)

嘘をつかない。虚言遁辞とともに卑怯とみなされた。武士の高い社会的身分が、商人や農民よりも高い誠の水準を求められている。「武士に二言はない」という表現があるように、約束は証文無しで決められ実行され

た。アングロサクソン民族の諺に「正直は最善の方針」いうのがあるが、結果は同じであっても根本は違う。武士道の誠は絶対的な誠である。

(七) 名譽 (第八章)

名譽という感覚は、個人の尊厳と価値の両方の意識を含んでいる。武士階級の義務と特権を重んずるように、名譽を幼少の頃から教えこまれた。廉恥心（心が清くて潔く、恥を知る）という感性を大切にせよ。「恥をしれ」「人に笑われるぞ」「体面を汚すなよ」「恥ずかしくはないのか」などと言う言葉は、過ちを犯した少年少女の行動を正す最後の言葉であった。

(八) 忠義 (第九章)

主君に対する臣従の礼と忠誠の義務は、封建道德の特徴である。日本の武士道は、この忠誠心を非常に大切な徳目としている。その徹底ぶりは、他の民族に見られぬほどである。（これまでの六つの徳目については、他民族の徳目と共通するが・・・）つまり、主君の命令に対する絶対的な従順が存在した。親・子以上に主君・国を重んじた。しかし、佞臣・寵臣は軽蔑された。

(九) 武士の教育と訓練 (第十章)

武士道を支えている大切な三つの要素は、智・仁・勇といわれ、それぞれ叡智・慈悲・勇気を意味した。サムライは行動の人であるから、武士道の教育訓練は、剣術、弓術、柔術、乗馬、槍術、戦略、戦術を習得することであった。又、書道の習得も大切なこととされた。武士は、損得勘定はとらず、無償無報酬の実践のみを重視した。

(十) 克己 (十一章)

武士道においては、不平不満を並べたてない不屈の勇気を訓練することが行われた。自己の悲しみ、苦しみを外面に現して他人の愉快や平穏を乱すことのないよう求められた。日本人は、世界のどの民族よりも鋭敏な感覚と物事に感じ易い気質をもっているが、それを抑え外面に現さないことが、立派な人物を評価する時の一つの特性と考えられていた。寡黙をよしとし、多弁を弄するのは、誠意に欠ける所作とみなされた。

(十一) 自殺および復仇の制度 (第十二章)、刀・武士の魂 (第十三章)、婦人の教育および地位 (第十四章)

(十二) 武士道の感化 (第十五章)

社会的存在としては、武士は一般庶民に対して超越的な存在であった。武士は、道徳の規範を定め、自らも其の規範を示すことによって民衆を導いた。武士階級は営利を追求することを堅く禁じられたために、商業の発展には貢献しなかった。しかしその他の多くの人間活動、思考の方法は、武士から刺激をうけずにはいられなかった。日本の知性と道徳は、直接的にも間接的にも武士道の所産である。武士道は当初「エリート」の栄光として登場した。やがて、国民全体の憧れとなり、その精神となった。庶民は武士の道徳の高みにまで達することは出来なかつたが、「大和魂」すなわち日本の魂は、この国の民族精神を表すにいたつた。「大和魂」は、ひ弱な人工栽培植物ではない。自然に生じたという意味では、野生のもので日本の風土に固有の自然発生のものである。

(十三) 武士道はなお生くるか (第十六章)

日本に怒濤のように押し寄せてきた西洋文明は、わが国古来の訓育の痕跡を消し去ってしまったのであろうか。いやそうではない。部分的に変形した点があつても大きな骨格は生きている。武士道の教えたさまざまな徳育を考察してきたが、いずれも武士道のみに限られた遺産ではないことが分かつてきた。武士道は無意識的な抗うことのできないう力として日本国民一人一人を動かした。日本の変貌は今や全世界に明らかなる事実である。日本に変化をもたらした活動のバネが日本人の内にあつたしそれが武士道であつた。劣等国とみなされることに耐えられないという名誉心、これが動きのなかで最大のものであつた。日本人の欠点や短所も、又多いに武士道に責任があると認めざるをえない。日本人が深遠な哲学を持ち合わせていないことは、武士道の訓育にあつては、形而上学の訓練を重視されなかつたことに原因を求めることができる。

(十四) 武士道の将来 (第十七章)

ヨーロッパでは、騎士道は、封建制度から引き離されるや、直ちにキリスト教会に引き取られて、新たに余命を保ちえた。日本においては、武士道を養い育てようとする宗教はどこにもない。幼年期の武士道を育てた神道は余りにも老化してしまつた。守るべき確固たる教義や公式をもたぬため、武士道は一朝一陣の風であえなく散つてしまうかも

しれぬが、制度としては滅んでしまうかも知れぬが、徳目は今なお生きています。武士道は不滅の教訓である。

三、村田のコメント

(一) 幕末に盛岡藩の武士の家に生まれ育った稲造が、幼少の頃から受けた士族の子弟への道德教育を基礎に、日本人の道德的規範を武士道・日本人の心 (The Soul of Japan) として書きあげたもので、その動機、意図は序文に述べられている。欧米の知識人を対象に、英文で書かれ米国で出版された。本格的な日本語現代文への翻訳は、昭和十二年(1938年) 矢内原忠雄氏によって成されるまでなされなかった。(米国での出版と同時に、日本でも東京神田の菅華房より英文出版はされた。難解な翻訳本もいくつか出されてはいた。)

欧米人に理解し易いように、キリスト教、欧米の文学芸術より数多く引用、比較がなされており、今日で言う比較文化論の嚆矢ともいえよう。当時から欧米での評価は極めて高かったのに、日本での評価が今ひとつ盛り上がらないのは、次のような理由が考えられる。

イ 四民平等・国民皆兵の明治新政府の方針からは、相容れぬ点がある。(武士の位置を一つ高い所においている)

ロ 盛岡藩は、奥羽越列藩同盟の一員で戊辰戦争では、新政府に叛旗を揚げた。

ハ キリスト教に帰依した著者が武士道を語ることに對する正当な理由なき偏見。

ニ 戦前は軍部との衝突(昭和7年、松山での軍閥批判、その後謝罪)戦後は反軍国主義風潮に埋没。

ホ 武士道研究の歴史学者、思想家からすると、「新渡戸の武士道は、武士道の歴史や実態を正確に伝えていない。誇張も歪曲も少なくない。」と、する意見がある。

ヘ 英文で書かれ、日本人一般大衆への理解普及が、矢内原氏の訳本まで成されなかった。

しかし、その内容は、我々が今日子弟に語るに少しも輝きを失っていない。一部を除いて本筋を採れば、現代の日本人がこのような徳目を再認識するに十分な内容であると思う。

(二) 武士道という言葉には、いろいろな解釈、思想体系があるようだ。前記

(ホ) のような批判がなされるのは、故なしとは思わぬが、新渡戸の意図、業績を正確に理解してない点が残念である。

武士道といえば、佐賀鍋島藩の山本常朝の「葉隠聞書」がよく引用されるが、必ずしも正統的なものではなかったようだし、中江藤樹「文武問答」、山鹿素行「武教小学」、山鹿語録、山岡鉄舟「武士道講和記録」などなど、多くの武士道論があるが、系統的統一的な思想が確立されているわけではないようだ。因みに広辞苑によれば、「わが国の武士階層に発達した道徳律。鎌倉時代から発達し、江戸時代に儒教思想に裏づけられて大成、封建支配体制の観念的支柱をなした。忠誠・犠牲・信義・廉恥・礼儀・潔白・質素・儉約・尚武・名誉・博愛などを重んじた。」とある。新渡戸の「武士道」は、この説明で意を尽くしている。

かりに新渡戸稲造が、山本常朝や山岡鉄舟の武士道論に精通して、この本の中で述べたとしても、欧米の読者には理解し難い一章が加わるだけだろう。

(三)

この本の著者の意図を一口で言えば、「武士道に基いた日本人の道徳的規範は、キリスト教に基いた欧米人のそれとくらべても、同じように優れたものでしょう」と、言っていると思う。

出版された1900年という年は、日本が世界史(国際社会)に台頭しつつあった時期であり、当時欧米の知識人に与えた影響は極めて大きなものがあつたとは事実である。2年後には、日英同盟が結ばれ、4年後には、日露戦争開始、5年後には、ポーツマス条約が締結された。

初版後、版を重ね、独、仏、ポーランド、ノルウェー語等への翻訳が成され、更に、1905年には、十版と改定版が出された。

日露戦争終結に際し、日本の財政的窮状を斟酌し、講和条約締結へと多大の貢献をした第二十六代ルーズベルト大統領や、当時の駐米英大使ブライス卿らの賛辞は夙に伝えられており、当時の国際世論を親日に導くに多大の貢献があつたと確信できる。「ルーズベルト大統領は、この本を三十一冊購入して自分の子供友人知人らに配っていた」と新渡戸の改定版の序文に新渡戸自身が書いている。又、高橋是清の戦時国債発行の苦勞等を慮っても、それは間違いないと言えると思う。日露戦争は歴史の上では、日本が勝つたことになっているし、表舞台の軍人、東郷平八郎、乃木希典、児玉源太郎らの活躍は喧伝されているが、裏舞台で新渡戸稲造、高橋是清らの活躍役割評価をもつともつともしてもよいと思う。矢内原忠雄が、その訳本の序文の中で、「新渡戸博士が本書に横溢する愛国の熱情と該博なる学識と雄勁なる文章とを持って日本道徳の価

値を広く世界に宣揚せられたことは、その功績、三軍の将に匹敵するものがある。」と述べているのは、こういうことをさすのだろう。

(四) 日本の社会は、国際化、国際人、国際派、国際結婚等には特有の偏見があり、今後いつの日か、新渡戸稲造の評価が高く見直されることを望みたい。

五千円札の肖像が、また復活するのを期待したい。

(約一時間半の発表で更に多くのことを語ることができたのが、ここでは、割愛せざるをえないのは、大変残念であるが、別の機会にまとめてみたい。)